

「成功する経営者は、自然の哲理を知っている」といわれます。生活を営み、また事業商売を営んでいく時、そこには必ず正しい生き方という、哲理・道理・原則があるはずで、その生き方を学ぶ場が、倫理法人会の数々の行事です。

「純粋倫理」という「道理」「原則」とは何でしょう。それは純粋倫理の基本となる《七つの原理》です。その原理に触れてみましょう。

「全一統体の原理」。この世のあらゆる物事は、それぞれ別々の分離した個体ではなく隠れた次元でひとつにつながれている、というものです。『万人幸福の琴』にある「人の世のすべては自分の鏡であって、自分の心の生活を変えると、その通りに変わる」ということです。

「発顕還元の原理」。振り子と同様、「出せば、入る。捨てれば、得る。与えれば、与えられる。むさばれば、失つ」ということです。お客様のために尽くせば、必ず自社に返ってくるものがあります。

「全個皆完の原理」。起きてくる現象（苦難）を嫌わずに受け止め、「これがよい」と肯定し、自分の誤りや不自然な生き方を改めていく時、おのずと苦難は解決していきます。「存在の原理」。人を対象と考えた時、あらゆる物事は「一つと同じものではなく、他と比べようがありません。自分という人間は、「いま・ここ」に生き物として、この肉体をもつて厳然として在ります。他の誰かと取り替えることができない、たった一つの存在です。

純粋倫理の醍醐味を 自社の経営に活かせ



絵・今谷 鉄柱

自分は唯一絶対の存在であるからこそ、「明朗に生きる」という実践が生まれます。自分の心が明朗になると、相手の態度も変わり、商売の結果も変わり、運命が好転していくというものです。

「対立の原理」。存在する物事はすべて対立しています。一方があれば、もう一方があり、上下・前後・男女・親子・美醜などです。その対立したものが一つになった時、物事は成り立ち、それ以上に発展していくのです。『万人幸福の琴』の夫婦対鏡にある「夫婦は合一によって、無上の歡喜の中に、一家の健康と、発展と、もろもろの幸福を産み出す」というところで理解できるでしょう。

「易不易の原理」。変化興亡の厳しい現状です。この激動の中で、変えなければならぬことは変える。しかし、変えてはいけないものは決して変えない、特に、経営の目的（理念）は変えないが、変化には柔軟に応じていくということです。

「物境不離の原理」。この「境」は「場」あるいは「環境」と捉えます。「物が物としてあるためには必ず場があり、物がなくて場だけあるということはありませぬ。社屋（物）は土地（境）があるから存在するのです。その物と境に対して、「この場所が最も良い所」と感謝することにより、社屋・工場も生きてくるのです。

以上、倫理の基本となる原理を簡単に述べました。自社の経営に導入され、純粋倫理の醍醐味をつかんでいただきたいと思います。